

森のたね



「かせちゃんは、なんでこれがタヌキのフンってわかるの？」

森で、子どもたちが私に聞きました。

「それはね：動物によってフンの形や大きさが違うんだよ。それと、している場所や量も違う。タヌキは、数か所ある決まった場所にフンをする習性があるの。これをためフンっていうて、家族や仲間が互いのフンの二オイで情報交換をする大切な場所だよ。」

「へえ〜！すごいねタヌキって：」

子どもたちを森に連れて行く時、野生動物に出会える確率は高くはないですが、野生動物が確かに生きているという証拠は見つかります。フンはその中でも、私が最も子どもたちを感じてほしいこと『命のつながり』のきっかけとして

大切にしている素材です。

私は、森林レンジャーと なつてから野生動物のフンに魅了されました。最初は、野生動物には出会えなくても存在を感じられるという喜びが大きかったのですが、フンをじっくり見てみると、小型哺乳類の骨、鳥類の羽根や羽毛、昆虫や甲殻類の体の一部、果実の種子が入っていたり、季節や住んでいる環境によって、入っているものが違うことなどが分かってきて、野生動物の生活が徐々に見えてきたことが大きな理由です。

現在は、季節ごとに実をつける植物の種子も調査していて、フンに混じった種子と照らし合わせることで、野生動物が食べる実もわかってきました。フンに

混じった種子の正体を推し、フンが発見された周辺でその植物の居所を見つけたりもします。

点と線をつないでいくと、あきる野の森には、多様な野生動物が食物としている動物や植物が年間を通してあると考えられます。野生動物のフンを見ることが、話さない自然を知っていく手段として大きな意味があります。

ちなみに、フンに混じった種子が発芽し生長して実をつければ、未来の森の仲間の食べ物となるでしょう。そして、皆さんが森で食べる甘い野生の実も、もしかしたら野生動物が種をまいた植物の実かもしれませぬ。